
空ノ蜘蛛。

seal@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空ノ蜘蛛。

【Nコード】

N5698N

【作者名】

seal@

【あらすじ】

トウキョウに住む高校生、成清桃は、1人の空軍パイロットに憧れて自らもパイロットを志す。

しかしそのためには軍部学校という中高生を対象としたエリート養成学校に入学しなければならない。

米の粒ほどあるかないかのその狭き門を突破した桃はトウキョウを離れ、軍部での生活を送ることになるが……。

軍部での生活、またトウキョウにいる友人。
些細な日常から厳しい現実まで幅広く描いていこうと思います。

空の下に生きる者（1）（前書き）

まずはこんなたいしたことのない自分の作品を見て頂ける事に感謝します。

駄文も数多く有り、読みにくいとは思いますが暖かく見守ってもらえるとありがたい限りです。

更新は不定期になると思いますが、これからゆつくりと書いていこうとおもいますのでよろしくお願いします。

空の下に生きる者（1）

太陽に焼かれたアスファルトからの照り返しを受け、乾いた空気が微かに揺れる。

暑い、暑いその場所で、一匹の蟬が飛び立った。

「第九会場航空科、推薦定員一名。」

緊張の糸はこれまでの一番の張りを感じさせる。そのせいか、試験会場中の全員がその不自然な静寂を守っていた。大勢の人の前で、1人の男が静かに口を開いた。

「推薦定員、成清桃！」

静寂を破る甲高い声は、空に響いて1人の少年の心に伝わった。

~~~~~  
「どうしたんだよ桃？なんかぼーっとしてんぞ」

不意に話しかけられたせいか、桃はハッとしたままキョロキョロと視線を動かした。「マジでどうしたんだよ。朝からお前ちよっとおかしいぜ？なにかあったろ」

二言目で桃はようやく言葉の主である基宏へとその視線を落ち着かせた。その様子を呆れたように眺める基宏の顔に、桃は頭の中で言葉を探した。

昨日の出来事は今でもって信じられないからだ。少しの間が開いて、桃は意を決して告げた。

「あのさ、基宏。俺、その……軍部の航空科の試験受かった」

「は？」

それを聞いた基宏はまるで天と地がひっくり返ったのでもみているように、呆気にとられている。必死に頭の中で話を理解しようとしているのか、基宏は目を瞑って眉間にシワを寄せてみせた。そして急に目を見開いたかと思うと、拳が入るくらい口を開いて言った。

「軍部の？ スゲーじゃん。凄いよ桃！」

放課後の人もまばらな教室中にその声は響いた。

「何、基宏？」

その声を聞きつけた、1人の少女が桃達の下へと駆け寄った。

「あんま大きい声で言うなよ、基宏。まだ俺だって実感ないのに」

桃はそれを制するように呟いた。

それにバツの悪そうな顔で答えた基宏は小さな声で少女に言った。

「若菜。聞いて驚くなよ。なんと我が成清桃が軍部の試験に合格したんだよ！」

その言葉に叫びそうな若菜に、基宏は口元に手をやって抑えた。それを無理矢理にふりほどくと、若菜は表情を輝かせて言った。

「凄いね桃！小さい頃からの夢だったもんね…」

そこで若菜は一度言葉を止めた。

そうだ。若菜は桃が小さな頃からずっと一緒の学校に通い、共に遊んだ仲だ。

当然桃の夢も、その情熱も知っている。

「まあね。でも本当に実感が湧かないんだ。」

桃は先程とはまた違った口調で返す。

それに反比例し、若菜はさらに声の調子を弾ませて続けた。

「でも本当に凄いよ！」

軍事学校の試験は相当難しいのに」

言い終わると同時に若菜は視線を窓へと移した。その様子は少しだけ悲しそうにも見える。

軍部学校。

それは200年も前に設立された中高生を対象とした、エリート養成学校である。

そもそも徴兵制のないニホンにおいて、戦闘での兵を集めるために提案された軍事専門学校だ。

入学すれば、家庭への資金援助、入学者の医療費、生活費、その他の諸事にかかる資金への経済的な支援が約束される。

しかし、その軍部へといくために、年に二度、国内の各30試験会場より一名という髪の毛程の穴を通り抜けようと、かなりの数の対象者がしのぎを削るのだ。

もちろん強制ではないが、合格すれば後の国の英雄ともなれるチャンスを手にするのも同じといえる。

そんな試験に桃は合格したのだ。これはトウキョウ中を探しても2人いるかどうかかわからないだろう。

「そういえば、軍部にはいつ頃いくんだよ?」



突然、基宏が思い出したように呟いた。

その言葉と同時に、若菜の表情が僅かに固まったように桃には見え  
た。

———。そっか。そしたらもうみんなとも会えなくなるんだな。

桃は静かに若菜のその表情を心に刻んだ。

「まだ連絡がきてないからわからないけど、もしかしたら来週にでも行くかもしれない」

そう小さく告げると、基宏は明るい声で続けた。

「これは凄いことなんだぜ！2人とも辛気臭い顔すんなよ！」

そう。

これが当たり前の日常だった。

だけれどその日常は、人を待つことは無く、静かに過ぎ去っていった。

~~~~~ 静かにけれど

力強く桃は大地を踏みしめた。

軍部からの連絡があったのはつい昨日の事だ。

夕日が沈みきるかどうかという時間だった。

軍部から明日の送迎用航空機にのり、軍部学校へとくるように言われたのだ。

あまりに突然の出来事で、桃は準備に追われたが、直ぐにそのことを基宏に伝えたら、大変だろうからと手伝いに来てくれたので予定より大分早く終わった。

そこで基宏とは約束した。

「四年後にまた会おう」

基宏はそれだけ言う足早にその場を離れてしまった。

その目に光るものがあつたことには、少しも触れなかった。

そして今。

桃は派遣が決まった、

ヤマガタ東臨海校へと足を踏み入れている。

数時間もの出来事が秒を読むように過ぎていった。

もう気付いたらこの場にいる。
そんな感覚を桃は覚えていた。

「成清桃！」

自分の名前が呼ばれたというのに、桃は少しも反応ができなかった。

「第九会場推薦、成清桃！」

それようやく桃は意識をそちらへと向けた。

「はい！」

「これから学内の簡単な説明をする。
私についてこい。」

そういわれた桃は「はい」と返事をして、その教師と思われる男について歩いた。

小さな小部屋に案内され、淡々と説明を受ける。

日差しの少ないその部屋はまるで、尋問を受けているかのようにもあった。

~~~~~「聞きました

よ。永田さん。

今回の第九会場推薦の子」

良く透き通る男の声が受話器越しに聞こえている。

「何でも、学科が悪いらしいですが？」

その声は何かを秘めているかの如く、波一つない。

「第九会場と言えば、航空科の定員ですが、ウチにくるとは相当模擬飛行の方が宜しいと？」

微かに声のトーンは違っている。

「ええ、もちろんです。彼の操縦技術は相当のものでしたよ。それはもう、そちらさんの卒業のあの天才を思い起こさせるようなものです。」

永田とそう呼ばれた男は期待のこもった口調で答えた。

ヤマガタ東臨海校は、他の軍部学校と比べて一つだけ抜きん出ているものがある。

それが、航空科だ。

数ある科の中で、空軍パイロットの養成のために創られたこの科において、この学校は伝統的に航空科の名門校と呼ばれ声が高い。

その証拠に、これまでも多くの国の英雄を排出してきている。

「それは楽しみですな」

また男の声が伝わる。

「まあ、我老林士官にいい土産が出来ました」

ふっと含み笑いをしながら、永田は言った。

「それでは、また宜しくお願いします」

言い終わると永田は受話器をゆっくりと置いた。

にわかには信じられないような事が、目の前で起こったのだ。

落ち着いた行動とは裏腹に、その心臓は激しさを持って動いていた。

「成清桃か……」

――時は2日前。

今回も自らの巣へと食べ物運ぶ蟻のように、航空科志望の受験者が、長い列をなしていた。

果たしてこの中に合格へと漕ぎ着ける者が現れるかどうか。頭の中ではそれしか考えるものはなかったが、そんなものは1人の少年によって完全に崩されたのだ。

「成清桃」彼は学科の成績では下の上と、あまり期待をもてる数字ではなかった。

しかし小型かつ安全性の非常に高い、訓練用の偵察機を使った模擬飛行試験。

それ一つで、度肝を抜かれたのだ。

規定の航路を正確かつ迅速にこなしていく彼の高い能力に、学科の成績などは無視で、電話へと走らされた。

直ぐに本部へと、「今回の推薦者は、成清桃という16歳の少年です」

そう伝えた。

そのくらい桃には圧倒的な才能を感じた。

「家老林か……これは厳しくなるな」

永田は空に囁いた。

~~~~~衣服の擦れる音だけが、桃の鼓膜を揺らしている。

先程の説明を終え、桃は教室へと案内されていた。

軍事目的に創られたこの学校に、入学式などというものは存在しないのだ。

足音なく教室の前へとつき、男は桃に教室へと入るように促した。

桃は微かに震える指先でそのドアへ手を掛けた。

——教室には割と沢山の人がいる。

しかし桃が入ってこようと、言葉を発する者はいなかった。

「今回第九会場から推薦の成清桃。学科は航空科だ」

男がその声と同時に、あるいは若干早く教室へと足を踏み入れた。

すると今さっきまで座っていた者全てが、すっと立ち上がり、その右手の指を額の前で真っ直ぐに伸ばした。

そのあまりに異様な光景は、桃を半歩後ろに下がらせた。

「成清。お前はあの席につけ」

直ぐに桃は指定された席へと身を運んだ。

その張り詰めた空気は微々とも動くことはなかった。

「それでは、全員我老林士官をお待ちしている」

男はそれだけ言うと、颯爽とその場を立ち去った。

数秒ほど時間が経って、教室は一気にざわめきを帯びた。

桃がそんな一変した空気に目を丸くしていると、隣に座る少年が元気によく話し掛けた。

「俺は木沢孝徳。陸上戦闘科所属な」

新たな場所での生活に不安を感じていた桃だが、快く受け入れてくれる少年がいることに、暖かな安心感を感じた。

「あ、俺は航空科でトウキョウからきた」

「でもお前凄いやな。此処の航空科は名門として有名なんだぜ？お前……、桃はその航空科なんだからな」

ヤマガタ東臨海校が航空科の名門なのは桃は初耳だ。

「此処が航空科の名門？そんなの聞いてないけど」

桃は静かにそう言うと、こちらに近づいてくる少女を視界に捉えた。

「桃くん……だっけ？こんな壮絶スーパーバカの相手してたら君までそんななっちゃうよ！」

「いきなり来といてその言い草はなんだよ！」

それに孝徳も激しく答えた。

「しかもよりによってこの若き陸戦科の天才、木沢孝徳様に向かつてとは」

「ああ、わかったわ。つまりあなたは壮絶スーパーバカじゃなくて、超壮絶ウルトラ最強バカってことね！」

目の前で繰り広げられる非日常的なやり取りですら、桃は新鮮なものに感じられた。

「ごめんごめん。こんなバカに付き合ってるんじゃないかった。私は寿夏希。陸戦科所属」

「俺は成清桃。さっきも紹介あったけど、一応航空科所属」

ちよっとした自己紹介だったが、桃にとっては新たな場所での、新たな出会いだ。

桃は心の中で2人の名前を呟いた。

孝徳に夏希か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5698n/>

空ノ蜘蛛。

2010年10月10日04時33分発行